

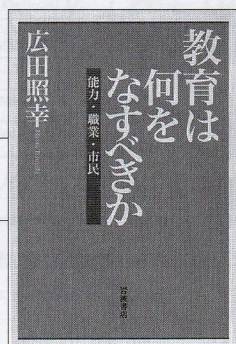
今日の「○○カ」ブームのなか、本書は、市民教育の視点から次のように問題を投げかける。「能力による選抜」の何があやしいのか。「職業のための教育」だけでよいのか。公教育は「公共」として何をしていけばよいのか。

「教育市場は規制がないので、怪しげな学校とウェブサイトがしきりに現れて、ぼろもうけをしては消えていく。公共の教育

機関は（これと張り合い）准専門職の狭い技能教育に追われる」（グラブラ、2004年）。

広田氏はこの論を引き、次の悪循環を指摘する。よりよい職業へ

の「パスポート」としての教育によって、個々人は競争の主体として個人化され、他者への関心や広い世界とのつながりを失い、民主主義、市民社会が空洞化する。他方、2010年「子ども・若者ビジョン」（内閣府）では、従来の「適応重視の社会参加」から、「地域における多様な担い手の育成」への転換な



教育は何をなすべきか 能力・職業・市民

広田照幸 著
2592円 岩波書店
☎03-5210-4000

ど、社会の能動的形成者のための支援を掲げた。氏はこれを支持する。

評者は次のように考える。キャリア教育も

「地域における多様な担い手の育成」の一環である。ただし、職業の場だけでなく、家庭、地

域での個人の生涯の充実という広い視野で行うことと、受験勉強特有の個人完結型の競争から、社会開放型の「学び合い支援合い」へと転換させることが必要なのであろう。実際の職場でも、会社より顧客の満足、競争よりコラボ、そして地域社会の一員としての役割意識が求められている。それを、抽象的にではなく、職場のリアルな課題と状況から臨牀的に体得させる必要がある。このようにして、キャリア教育を能動的形成者への「パスポート」にしたい。

（聖徳大学教授・西村美東士）

